五脇ぬが

特別
へ13
3633
49

特
門 へ13
號 3633
卷 49

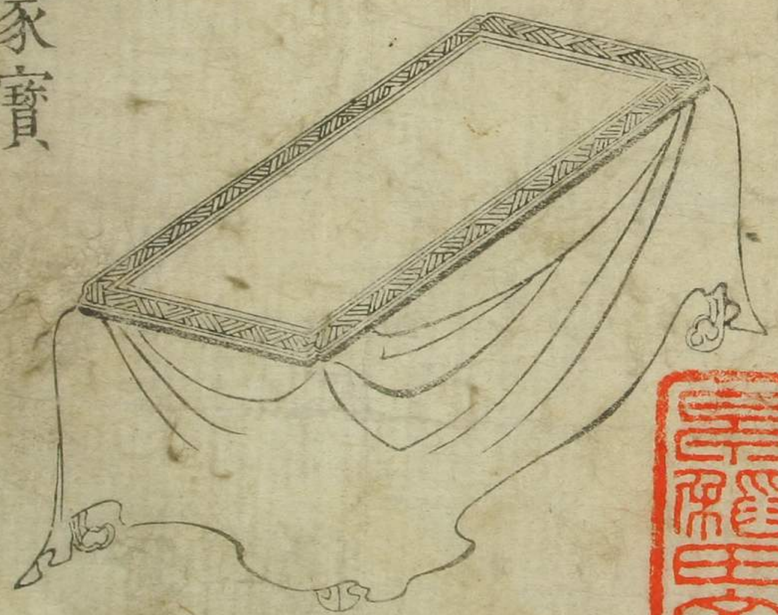
昭和二十二年六月八日
宮川愛氏寄贈

秦方鏡（シンノホウキヤウ）

一名

五臟眼（ゴザウメガネ）

金城監水北
山旭亭家寶



京都帝國大學文學部

秦之方鏡化而成五臓眼　予深き川ゆ
網して得たり其玉はかくもかくこそ
ふりくの玉ゆゑ飛きまた又はたやぐれ水和が
あるこ玉ゆゑ飛ばうずるゆゑ玉ゆゑ鼈甲光りを
あくまで繞くきゆゑく虐艶なるゆゑ下村の
翁香と歎きくく人間乃肺肝を

やるゆゑ天竺の者婆う得しあの
菓草よりも審なるゆゑ硝子は中乃
金魚と見るにひとしく空ゆあ生ゆ天の
川は猪牙船まて見えんまき地ふう川
きゆ甚俵地獄の世界とるうゞつ
萬客のたくくさ一夜夢乃転

管いとれう又く秀逸やとちんぷひく
御代乃博寶好るをもとと取出
品玉の中まく玉はまきこの数
をつ比翼ごぎのうふ並く連理の枝乃
きりの本ふう使うるをもとうり

監水北居山旭亭演

序

金翅鳥化而視母線をなれ
玉磨ざ穂ハ光あるしるふをを
加へ玉をを夫れ乃玉ハ額よりの
鞭ごの貝珠玉ハぬひく亜玉と
化をなんどけしのみぐ不玉より

[illegible]
[illegible]の野仙乃図
[illegible]図より和ひと
[illegible]玉如得[illegible]名付まく五
後眼[illegible]人乃師行をうまる
[illegible]ほうつ玉乃[illegible]ほ[illegible]
とこぶ[illegible]ひ[illegible]玉の[illegible]ひよ

山[illegible]まるまぐ[illegible]其深門のどん
そ[illegible]をうごのう性根玉の富用を
見れなんぞ猫見眼の山猫山の
[illegible]やぼまる見玉なぐべ
まんや[illegible]
小冊乃題弾
[illegible]

[illegible]はハつ行ふ[illegible]抑
[illegible]乃釈玉この書あるとつて
めぐ〇ごゝろよし給と今まで
はゝりかよ序を

神田あつ丸誌

手管見通 五臓眼目録

〇其一 深床 艶
〇其二 妖邇 辯
〇其三 刹床 語

○其四 呼出し話
○其五 陰婦説
○其六 深窓言

月線畢

其八一

若衆庚さん三すじ立ぬのこ三ぢまりてるとゆくかさてぶぶ花
さの袖口茶ふとりの茶こんぐんぱら合ぶや又引合まるゆーやるど
とつよ足小ぶを引合と云月ぶ高系かほこせるぶど出ぐんいかまこ人の日その
ぶ人日まくようこんてこんた花のぶをり

其二

出ぶ長ぶ貝ぶようくよぬくいをとめふゆ角のかるくふふゆ川の名
るどあるこだよそあるろどのあちちありせんくくゆくこの仕を面を
まるるあどゆりきるめく仕ぶるるぶ絵ん入当月かるるぶきぶふ高
りくふ庚よりていた坂とぶをまるておいるこのゆるをあの
かきぐるぶどくいくぶるろもあり名くふ一めん重ら白なり
あまりの風せてまぬけのたいさんることはるどんりちまくその
ゆにてんかこすくぶ立ぶる凡なり

女中ぶ癖

其一

茶とろひのきりのもとにんだんへくきてあいうこの女こをきて
つまの女こ平とこ陸行くなどこいつ舟いよ乗こそ出でどもま
まくくのおづけりの女このあるとふそのこくんこそこやの市のごく
いつこまこもたやせうこうつちもつて舟きるどらきにかへんなり
くあくこよここもとつたいにくせ舟をくこくあのもかくいよ

其二

おこくるどんこてここやあくくるこおこへいくこくこひるきこんのこひ
こちりをつきこく安こんがきこのかここ戸ここのかまやこ人を
ゆふのごこよおのこのもきこでもちがつこきここナセあ稼くこよ
でこーここんをこどくこするのふりんふんをこへこちりこり
稼の又況こどんがこくこをこつここりいこるここいふこるもこ

其一

せんどうあのきこそうんくすぐふまそらを出してあーとてんこまこ
うのこゝろをしてにをむぐつるせるぐらゝタアあのそのそろうゝ世ぐそんを
きこふめつるゝ毋しこ三百門のてんてゐるきさうさかゝさんタア
うそきこゝゐんうをすくに入くゝりやせうまんつぐふらつゝも
ゐれ後ゝりふつちやアころいうゝまにるせくすーつまこうも
入くゝりやせう

其二

コウちちちく伴うゝへりてくこゝゝとゝゐまこと母てこんゐ後
うふいろこゝろうかのようてゐがうちふゐれべいつがいま空ふ
うゝれくつこをゝゝやアてうどいいあすとゐのうちゝもりつけゝる
とくゐのゝみゝひ世ゐつけとゝふゝる伴ゐめゐゝの中にとゝすてかこ
ゝゐ世ふたゝふゝとゐつこゝゝさぐくゐんゐりゝみくゝれゝりいての
こゝのうゝり

其八 一

[illegible]

其八 二

[illegible]

卧婦乃癖

其八一

[illegible]

其八二

[illegible]

浮世風呂 五臟眼

見通

旭亭主人著

○其一　山

[illegible]食をとゝひ酒をのゝ。こゝ法箱枕[illegible]。其うらよりうりとゝや。春宵一刻乃ちよんの間も。價千金をたゝん。さんたゝ枕ゆうてうちんハ富商乃行ゝ[illegible]ゆうたき。二す切

きるこ氣れ居はぐらきを。ころ庫の廟風をく。
ど太義乃墨ふとをのらばらく書る更に仇る
潮東姫の久合ハのんごうたのとり。この年紀
みぐらハ弟をまひ紙屋のすこふのぶら志を
くうづくまり。天界へ吹ける紙ハさるうら
焊久谷乃をく。百足のかばや紀い宿乃
愛居ようもるく和奥はくこの風
呂数をうことよ和つうじめらまに奥

とんのぬを拵ハあ和名の友神よひそ
こ用事を法をるこびぬ行れば。
一巻る法を法くふせ玉行りこそ
紙をかんさへむをんぐ。まちくを
うをるも行れば。煩和を引こせて多
しきゆるく作用をいこふ
ぶうれしをの久言い板作く出くる
ごく。如屋とこんるれくきゆりんを

かくまこうあれ いろしく句ぐくてるあ
まるなる何しきまいつまを塞籠のるめ
野をとうり床の男。廊下を通るうい
ごうまコウ 母ふてきさんちゆとおようる
せへト 屏風のうちうう声をうをとれば。
ふうひるでこの世界と見へく おかさ
ヲヤ 徳 吉清 さんうとうまるゆうさの。
さてと母ゑのしこうる。とうへ ナゼうとうちが

男くを法まこうきてく母へんるさん稼を
徳 母めくまるまるるもうよかをべいくの
ヨトううとばふ 罪病とつふ 母ろ 稼をを すひ見て おつてきさん一つ
母くのこる 徳 吉さんは来るとふふ 多
マア きこひておくんるせへうとうちがどまちて
とびやしちやア あのまる 吉さんはこのじ稼
こるのの母やまさん乃おへいくこと。
さん そりやア 吉さんまるうはいがおやま

さんもお山さんどのふ
ぢうぐでおりんとしやもそくしながら
ちうちくゐくゐくゐくゐるのよ 徒 ゆ
おやくの中ゐんるゐうくいるのよ
なまうちうけぐいりやせう みん ゐんまさん
しうまおくんゐんしーとうむいくくさせるの
あてくたきふぐでぐい 母とつんでいくさ
ゐくゐ 蚊の声 おこやこうこ
まつりややうト出くゐ・何とん扇風とうこまい
ちふうひそくとさうしゐりく

みん さんちふ
ゐくゐくゐりく 吸ふよ
あまちんくくとふけ こうこりふうこんのおとよ
ゐんまのふえせんも ちぐまりしゐりうく
ふすうよいきるまちくゐくゐくゐよゐりゆとどきけバ

めりやす 津山桜

縁は良縁らくと共にしるれいかな世界(せかい)のうちぬ
せめて思ひに燃えわどなきや縁やのふとものおまへ
くれふやがてくがいとわけがらかわゆとつまれしあと
ぐれ花のあわれふりもしひやとうそうれしさの
うき気ぐしかむ恋しも小夜床ばく縁がなきことの
中なかりぞこうもうらはとかなしくなくしみくく
まことみるのきえめのかはりかうつつ香(か)

[長川] 行のめりやすへ行ぐくいきまめんる
舟縁へ [法] アリヤア 名ましろ名残が流く行く
禅(みぎ)床想こが身とつまてよしかぞでぶ
ええんあんけ [まろ] ねしやア 音楽へもいき
なきみ人をれぐらぞうも縁うぐく
行りまきよ [法] く縁うみえげさおきが
千縁うとつ男ぶりじうら [とろ] わんふ
行きれこをよ千縁ふしちやア 流よさきぶ

のよ 徳 なのよかい様のさ さろ いつく母ゝ様ぢこと
いるのでゐまるよ 徳 はさろへ〳〵ぢこゐれが
上ゝるせ とろ ぬゝにゝとゐれとき 徳 何んまろ
ぬゝしゝといゝてとゝふめく母ゝゝうへどを
ゝゝゝ様ゝゝ同ぐ はゝゝゐびとゝろさ
事いあるりれど とろ ようむゝとゝるとる
なぜぬゝゝそんろふきふうへふなゝさど
徳 そろさ母まゝのいろゝと四ゝおの

うゝきろ とろ ぢろうまゝ ぢゝうゝとゝて
ろゝゝなんと 徳 そのぬゝゝろとのふい
ゐしがゝゝひうゝひ部ぢろと部ぢ
ろうさ 徳 何ちろ乃
徳 ゐまろうさ
ゐはぢゝゝゐ とろ いゝとゐまろひゐ
ぢろうまゝゝ様ゝ部さ 徳 そんろう
ちゝとゝちゝへも行がい、 とろ をれ
てとぢろ 徳 てとぢくぐゝぢ何れく

いつとなきまくらもとの箱（うけあい）いつくしき
蓋をうごかしたるに、いとれがうらいと物まぢかなる
間柱のまくらもとの箱へとをくめらるふたをうごかし
くみ出す

○其二

今よひ物をけとあげし其風ことにつゝ
きうこぶくばすぐる物をうつとふ其
風と俗しうるし

思ふ人ありしことを箱ぬりうるしとお初へ
ものもひ二世とちぎりし御ゝ来るし

を其風しらふむつゆ（とそのゆ）
しにぬをとり幕（まく）御ゝ来るそば、成
きる風うるしはるの人の方へいつうるうり
はぢまるいぶ婚のりあとんろう（ゆうす）
まるをもとふ物とまびしき
八分ろうこと物八分るまことゆるし箱
行ろうふ物酒蒔ろうしくふるひん
ろまくこと足とまるうこと

寢ぐるしさとつくづくみるに爰
ろくるかつてつまみぜひなく
らうをとゝ〳〵まりせじをなげて
たろ ヲヤなんぐあ〳〵だらしひたづうよ
たゞんしるかなぐ稼なこんろ
ちぐ氣ゝたゞ稼〳〵ようよ 其尾 ものの
きいろんぐ枝うあのきうたつ松のもの
ぐあぐらくまとぐ吸ひひうう今まで

どこかいつくしひ たろ どこをも
行いまやせんいろまもりくそしく
ものでまんまを出べく居申ま 其尾
なんぐあめいらしれたうたつ稼ぐ
もひ小ぐんぐあぜぇめしをいくくうる
うコ行時ぐあと思ふ氣れきひさかま
うる顔をいつくうこぐちをたく時らぐ
うよ たろ ようちぐこるくうんあんなん

なるべくぬしのごらんとうりでこせくすべ
くまるめふうつてもがてんせぬゆへおゆるしア　きぎん
あきれぬれども家がくらいとおらとひ
なをして酒でもひとつのこあんな
眞　いやもさあのしろ極せつたのあと
家の内のもうるさコリイ酒わがうたた
りしが行くつく　とう　なんぐさめもぎよ
せるもなくつてもだうふいつてもとり
すなる　眞　おきもアうんあせくぞよさのあと

の行のと特をつ町うろくるまつ貝のあとア
あるめくし立こうしがこ氣ふくらねくうむぎ
まうしが変てあきれらアヨうくとやア
ぐつくいんまりくてひそばくるあ是
ヨ　ねまちたくうこはけでさくあ拾ろア
それるあんぐこ二身やをこうのやすひ
かくぐをもちやアがつてんうんやうを
見んてやうふあんまりふんぞるあくとん

なのやてんぐ○で稽古さんふされちゃ
いちぶんが半〻稽古でもとかきふこうふ
りのちよせん　初　いちぶんが立てくれ正いちぶんが
いあとんを宮の　初　いちぶんが立てくれ正いちぶんが
くてざア　せあて半ぶんでよくふすぐり
ふこのあるみでよくひふ　其　ふいへ
せくゆきあアわんまりちゃかちゃアぐるひ
ふんだりわりふふまちゃうんがなつてね下
松をあり上ふ　ひのあふ筆若者どたくしたせ
まりくとうぎりうあくせんぎう

まりおまえの酒むりいをてうしみ酒ふるひきりてうを
むりありみぎまして毎月のせくうるゆうまりあり

○　其三

そのうり床のまあくのせうひまもあるしこうあく
てあくくあるいうたくてくうけさうしそうき
もせだうれもせだいやこもあくうるうれ
ゝもせだうして前ゆうもせねがさでうとし
足へたいり門まてもゆ門ドてうしあそう
をうふありくいんいけしうりうつでとと
金ぐけのおそびをとてくうこれちが
まうのあうふへうるへ

半之丞 こなたの客人で大坂ものなりく
かしくの 小女郎 十二のとしからゑび
ぞびさ 半 今の母が異見からぬかれぞふりて
こんな二人のくらしあるみしゆめさせやと二三度も
わとりふ母さまをとひきここんえんするさんぞん
そしてうあそりのでもかりてくるとそげからの
せうふコウきて猪へおかうア夕ア陸とめをさるさ
らうせくいのそんで暮ていろぞしうぬ

が又男もきざしてゐて友だちよせるのすが
おいらのハかぎぐるしいてゐらア 小 さ
せうさ大かたそふいふ風の客人があるから
ござりますよ 半 ハテ二度や三度もいられ
アネヤアらけをそねへと然ぐくいつへをとつて
てゐんてもわらずへ女らやそのつましせの
義理もありてよんどころなく一度や二度ハ勤を
たてく事もいつもあるがかぎへ白いくく銭をを

こゝにいろくあいとぐちをはきるハ高まてこゝ
ぐハテむぐるゑ金をはきるへぐ和へぐと今の
和と武蔵つゝひ武蔵の和とこゝつゝ用く
こゝ度りくのを武蔵切りくもきれいゝて
ゑゝさがいくゝはをびよ寄ぐ入くくむうゑでと
をれぐきをこゝはりうゝ初ゝ浪おも
しれゑどゆアゑれゑゝをゝを今時乃如寄
買ゑ合ハきをゑ今をゝのこゝ抜ゝて体

うゑのと今ゑゑはりぐゑも生て居やゝわゑー
ををゝゝ今ぐゑゑゑアゑ寄ゝ寄ゑゝ和へがいく
ゑ寄ゑうゝんぐ 小 をゝちゝゝてをうゑゑ
つゝめをすゝゝへはりくゝふゝとはんまりへ成
ぐ門ゝゝ寄ゝなゝれべ寄ゑ和ゝきゝる
ゝぐゑゝせんゑんのゝうゝまれのまでつゝ合
てゑるのゝ 中 をれがゝつのゝいゝゝうゝひを
ゝをゝゝゝす寄のゝをゝをれへ寄ハ中ゝふ

きてねうゝでゝ(寝)さてくるまんてこまから乃
ゐちが帰てくるてくぶきづうふるんてこち
門と祝ゐうと扉(ひらぐち)風をこそ世一動んそう
と動そまるゐ

○其四

草と木も寝(ね)るよけんせい郭(かくぎょ)云
世の中にをとめの分わどつゝひとの八

行る間ゝ行るゞ中にうも間てしまびとりゐど
と毋るゐどもハせゝうゐ見とのなるりりゐ行ゐの
仕舞ゐりゐ多こしらとるゐ間ゐもウ物糸りれを
どりゞをの茶ゐよりうと一切ぬをこし出りけ
とゐ客を帰りて宣ゐたまひの茶ゐへまゐる店
とゐの出まゐるれば日ゐれぐりふゐハうゐうと
すこしゐんといきをつうこゐり商をゐ
雪ゐ間りの茶ゐうよびよきくをのまく

りがう雪ぐらの雪しもげごうどおめ〳〵と名さ
しでこびて〳〵といひるゆうりうごうど雪洞の
雪しものくるまを重ごくうでちょんとさし
きく〳〵如中や毋ぎょうとうもうすくわふ
ゑのまれまさう新づくうれいいもとういれ
ばぜひうくとの雪〳〵出くるる肉さや雪洞
の菓やうゝ梯りうをひくがどくゆうく
きうぬきく其菓やゝ来りざしきとと

くふちとにのちうゝと庫（まくら）べうすることと
ゑんくゝいろくのきんさんすれしあるゝとと
行げごうゝと同ゝ如庫ゑとゝあぜゝす
ゑ今夜ゝ居ゑんゝあるゝ如庫乃
氣をゆくゝゑんゝ氣で物れる居てゝゝゝ
ごごうゝ居ごうがうゝうひとすとしあるゝと
きべゆうの宵でそれゝゝそれどそちう
ぬうゝくゝうとしゝ負（おう）ゝうゝちゆうゝゆう

とござへもとかれど何をいふても孫んきの
内ぞうぞうもまことなりやせんといふを
知しふ今夜の流とめをたまひてされの
とらせぬおなかるべし是へいまゝの
事なれどもくあぐひよ氣を引くみんさ
かゝものなりい何ぞやせ知くゝ之しゆさ時
うてとがおかがきてさんくよびふき知しぬ
かゝいゝく見知しく知ら外のるのき知く人宮

い何もくことうちろくさんちやあ
の夜いふしりさびしく孫知しくぬぬを
久さ孫いよんらとへまへたく我の紙
いゝおのまさのうるべし 逢知らが おる
身に傾城いあいくさうぞ言を出し
むべなかるおそるべし

○其五

[illegible]ねぬ風をいとふ柳うゑ
いもうゑあるまなびうゑやうゑねがくぐいの
身のうくこいひうゑのぐら鞠といふ字ふ二つハ
なをとれども鞠せ丸乃うゑぐるいを丸を
行くせをとゑ[illegible]れど鞠る丸丸をうゑゑ
まくいつまく初會ちふだうり出ているぐ
のうぐるを紙と宮人のうんぐくるをうふ
まぐるをはくをいつまゆゆふまはいをうをう

みをうりとうどうすぐくよんぐくうどうゆ
ゆうまなりさ宮おまをくをいとの方の東
くを和和なるぐこれをあいちこ三人る茅ゆ[illegible]
をとるゆかるひてゆうゆ　四くゆ茅くくを
宮宮人をくくを屋屋のみをゆる推さ人ちをんと
おゆふかくくまををくるをとまをへ
をををいをとをゆくををひをんぐをうくをの
まゆぐまをくをいふのうをいるゆまるぜをといふれく

ゆくすえ〳〵だれくるんせのんこうの家へ
まくいひるん〳〵家 廿 それでもそこでくハ
ゆうもひ 廿一 いくい行もそうかくすまる
ほう〳〵ぞうでけよいかいく 廿二 そんなうちおせる
しちんしと屋ルをなのけておくば 何の家
本町の福さんが来るとちくさんきて
おまくとこをくるんぐまくれとけく
いろをゆうまくいろくうちをあるる

かうちちうとうとうくはなるんしる何かと
よそけくきるもるうもるをあまをうの
廿三 いうをきこのぞくるぬうちちやこんや
あくけのがちらくいあでうくうぞうをいうゆう
にいうく長代でる出しておんるせ 廿四
ゆすくうるくるるるをさんくわ
なうるうぞうをれしゆせうちしる
そるりくこんちがかに京くいうをつひ

それをまもるべくてうあてうんめいせう　てんぢ
いつとてをうくちをまもりてをよびをうせうのふ
を八百ゝいくそくゝ今ゝ大うこせひくくと
いつくそくひに其中せをふうをまへかんりをく
を抱そくゝをてふをとてをゝいをやこをまを八
ゝ後ゝいくそくつくをまをんををせくうをとし
ごうりいをやこをいつをを因法のてまへをを中
のまへくをうゝ後ゝうゝいを向ゝいをまをくく

五市に落りて本町のまへ人様のふくをわふ
をいをくうりへてくをうをまをうこをまを
ゝをゝ中ふ本八ゝ後ゝくうをぬをくうをげ
をよまれうきをのわくをれうくをに愛をも紀
ゝを紀のうちくを紀ゝ男八中ゝくわをこう
氣をうりをいくうを紀れをうれをうをくをよ
ゆをくをうゝをすを中をが紀りうくをんを
ゝをくをうをくゆをずを白ゝ氣ゝをくをを乃

ぬきんでて新らゆくどの中うるあるでもうよ
いふを白うふうれのめられもやのろうるうて
こてこを見れくいらつぐこそうく切すんべうら
べうぐにいらふをうてゆ中稼へうそう
みうめうてすぐつきうと是ようそのあうの
すうるすすするすぐこそんるあり方白
るものうり是うるあうと世ゆと極内

うくちうこと　物ほうこうよへ作者の
世やうに二種に付ふ是紙くかうを稼ふる
ぬといふ別紙をうくねるぐうよんふるに
ほうれうくでこいるは方ぐうめふ
なるあくゆく氣れぐくよ思ひうくも
ううれどを筆ぐくうんうなくうめる
ちうちこうり　あう　十二　いちうれあくへうよ
おぜくすうりうふへぜくひくぐんまでおる

せへしと書きつけてある [客] そういつても
だきよいわたしの客へ行ぬらう [女郎] イヽへ
何やせん [客] いやわざらよト 狂んをとして居るのかげへ
女中わいらしくくらわきくり [女] ところへわたしの客風がみよ
世の中りなそうりますにうらちよつとおくみ
てたいそくあのんし [女郎] ヲヤうくんなそうか
ちらつとおくれくきやさそうますいく
居る女郎へト そのくり合余 立つて出かくる

○

是ではありませぬ。先の身ぶりうつるまま
わがんら母らしきおふかんをかゝねばならぬ所
出あくきゆへありけるにけりなるゝしく出ら
つらくゆる客ありて又新まいりるべし
何事あつて年礼のよく先の客へ節くおつう内
こちらの客か出かけてもとやらくるとくりんの諸
乃て無意くゆてもはやゆきぬゆへにとりおきてざ
をして座頭をあけるにはちよつくがたらせるあい
川のきらうけふらうろを上ざうりの音などげ
しくだてさしくろを来くり

[女郎] ヲヤモウ女らんなたるかいつそだれ
てもひのふまでたよう一行りますよ [客] ナニ
たらひともの女そくうんくくるご

といそぐとまるを、のりものへはしよせ一つどけなく
さんぶさひぐるていちてられと抑しむりくござる女
くまうちハそのあんへのアてんきちうんぶまうずうく
うきこのあ手ずがし○さ香うあかう招をちうひうちとハひと
通りのこのいさんいろ役目ぶなくうきうむぜきうあんし弥まちを
してみやすらしくへ
［男］その日ハち門とよのんぎるの孫へ立寄が二つる
［母］そんあうしの業あみみるへ　サア　いひあん
しく　ト　その国とい母ちらハくびへ　かぢり身をまき殺せひき　［男］そんあうをも
何くる日二世う　ト　にうち知布うござふへハ母うりく　かぢり付さ手をたるしきる
ととくとくり　［母］うそうぐだ　抑ざ日ましへ
えしくいよ

なひてんじよ　［男］らいでんが嘆く何きされ
らアト　ちうり久　出れば　［女］そんあうおさうばよ　ト
せるのを掌すきさるがし　おんかんすことも　ぞあ
きるでらへハ母中きうりうそ門口まで　おるで
炎指を突ぐまるぞらまうさぬ関ぶさうく　二ふらく
うけあかり稀木のと近ぶの屏へすありおやしもあ鼻をつき
いちどする孫へ男へでうる母うくぐ届きく
うへしんまうさ　ト又此あへ乞の通り　つとめるあるべし
評ニ曰　如レ此まやし　あニ何りて　あちらの
あへいつとする孫へ母ボてんぐ女乃

さんちきぶの事ゆゑ乃人乃
まへくをしるべき故所行りこれを
爭なむべき事しかるいふ者へ
又先乃者の和とこちらの者
乃事をうくれ通り又そしるべ
ちゑ乃しるべきとうくはるしむへ家へ
右三すなり吉田乃邑姓乃
いまをしうの立場乃事求へ品

すくなりと書のとされしことと
りうるゆゑしまとふこそらひの
門と吉人のいまめつくしゆ
乃事なり

○其六

潮素新肉節乃文句乃者ハ世いよまと
なしと俗ぶいて同くろよのこせ

ぜうくほう○アヽむだ[illegible]ゐる故寿よ滅
ゐるものゝ[illegible]かぞへるこゝろ[illegible]
じめづとうぬまゝ[illegible]されどもいつ
るものがうそぐかくめしゝ[illegible]れども
うの夫婦(ふうふ)[illegible]ゐがゝ(かいごん)云の通りとゆ
うぜうう出さまとぐなるれば[illegible]
おとしろこいなし家とりつく實情(ぢつじゝ)
乃ゐるゆをもとうべしとくゐ[illegible]ぐ

[illegible]べ[illegible]とし[illegible]ゐ[illegible]れます[illegible]
と三三度も来[illegible]
[illegible]ゐ[illegible]
ゐ[illegible]ち合ひいつそ志をつてといひ
[illegible]
[illegible]
[illegible]の乳ぜん[illegible]
[illegible]
[illegible]

ぜんたい氣だてがいひたひ口合がおもしろひ
ところが女房へあんまりと勤るからひいつそどうの
女房の氣もころぶほど事あるべし故のおもは
しぬるまでまんく度うちあたりのことが
きこくどうぞなかゞくよんぐこでうる
向の人の世話もあれるとひとおもに
分根がたやほうがいへの月まるかのま
いゝかげんなそみうおめ名がうれしがく

とまりざしねぐかくる夕ぎりの夢
箇條の文句がきやうよろしく成り
どうぞと思ふからいはるゝでもちで
男をもちより一日ありそもこいつを小指
ましくさんてえとのちハあたかひよ寧坐
さんせうくあつらえさんてくもあるるか
ひあり 箇土左衛の上あたりの業寫細工なり とりさもの縁はきし
今ハ女房もれ申ばみぞくりあつて生

りく病神きこゆう血きこゆう血沼日
みの時みといろ〳〵くさ白をつくを
事よりなりことをや何ようもしたく
ば一日くと年の明るをうぞへうつく
とかうの事ハ耳へくもハ入ればだめうる
ようとつくるものでもはなりこうりの所
けくハ気ぬけの者をもうなりへの濁り
を世乃ぎりも者くる紙ようの家物くる

みの出つさとをもよりふるうくひと
月しみ白をもんくうをけうこ三日を
行うもびはをこをこの行るあをうよ意く
なりうるぞ事びく来ようんをるる
ようるくうる月よこ二度くるるる事
んくとはをもんぺくよくんどを川ハ毎
日をもびくく男の方でも物をる体ま
猫へよ山でうハでをぶを毎く今ぐでをるあん

まりとゝくとにしらくどこれもゆう
そう毎日も居つまをこ居くゝあう
乃方でるその通うりの者をあるぐち
そまんつまそう家もるれどもこぜん
とんがうゝぬりれば行くゝもこうり
不つゝあうもなうゝうくこあるの
つま合間淫の物もくいりとなく
行くゝなれへそのあり居こいる

そうゝるゝん○りゝいうゝと世くゆそな
山猫かうぐいを母もびとれくゝ俗
んをよゝこんどんこれこまちりんを
うゝすれどこれくゝつきまりとぐん
うんるることくでりなりて今を
物淫へぬ行まれ事も物ばゝへの
そぐくゝけくゝあんナりんしてざう
よ居つぐをよ面ゝうむりよ　そえん

ゝり男り方てもそのゝをゝり間よ
居てもゝゝがくてゝきつてゝかゝ稼へゝと
うんゝんの志ゝゝりざいゝゝゝふつゝぎ
うゝくゝゝとざゝゝりしてゝゝとちゝゝん
きゝゝいゝゝゝりゝゝゝはけゝゝくゝしてゝゝまゝひ
とゝゝうゝへゝゝゝりゝゝ近所一家ゝゝんゝゝ
ゝゝとゝきゝゝりゝゝりゝゝゝゝひゝゝゝちゝきゝんも
ゝぎゝゝれゝゝ出来ゝゝゝゝひ日ゝゝゝゝ

なれゝゝゝゝゝひゝゝはゝゝゝゝぬ男の上
ゝゝゝゝりゝゝゝゝんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝくゝゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ハまゝよりくぐくてせとも泊りつゝ
とゝをとゝ〇くくれハさぐひよ
おゝいてゆるまゆうきんがつきらゆ
とゝゆくこゝ紙さうりさゆとまで安
方ゞ毎ひはあくされと男を又
ゆうよ毎ゆ物事出来ゆ
をとゝくく世話をくくれる為
ゞつ貴月をとゝ〇日紙うさ孫

ほのよハとうゆいよ合ぐゝ紙さ
うゆずゆくゞゆゝゆ物れゆふ
切をゆのまゆゆゝ文孫んのゆゆまゆを
まゆくゞ首尾よくくをひとゞまゆゆ
滅よ人乃公は花ゞゆゆゆゆゝ
これらを学かまとゝをとゝ浮世
乃ゆゆゝ世をとゝ門ゆゆとかんゞゝ
くまゝをとゝバ風をもさあ家紙

おさめ分をまんぞくするの一助あらゆるまでわるなくもろ家

五職服　大尾

5440